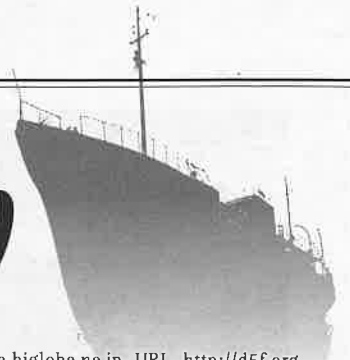


2005.04.01  
No.318

# 福竜丸だより



発行：財団法人 第五福竜丸平和協会 連絡所：東京都江東区夢の島3-2 〒136-0081 第五福竜丸展示館内  
Tel.03-3521-8494 Fax.03-3521-2900 E-mail:fukuryumaru@msa.biglobe.ne.jp URL http://d5f.org

## 原爆まぐろについて

第五福竜丸の原爆まぐろ事件については何かと御心労かけ業界人として恐縮に存じます

拾五、拾六日に販賣された「マグロ」中に含まれている可能性もありますので拾六日午後管内全店舗のまぐろ在庫品を全部回収致し藤枝保健所の御協力に依り販賣残の全部を廃棄処分致しました

したがって今後全店舗から販賣のまぐろは該事件とは無関係の現品に就き右御含置きの上倍舊の御引立を御願致します

三月二十日

焼津魚市場  
焼津  
藤枝鮮魚小賣商組合  
青島  
外藤枝保健所管内魚商

右残餘商品は全部廃棄した事を確認する

藤枝保健所

第五福竜丸のまぐろは全て廃棄処分したことを市民に知らせるピラ（複写）  
藤枝保健所が発行したもの。焼津市の石田嘉弘氏寄贈

## 被災51年目の3・1ビキニ 平和協会「記念の集い」開く

今年、戦後、ヒロシマ・ナガサキ六〇年にあたり、3・1ビキニデーの諸行事について、東京空襲を伝える展覧会や体験を語り継ぐ催しが各地で行われました。

### すずさんの願いを 未来へ

第五福竜丸平和協会は、三月五日、3・1ビキニ記念の集いを夢の島マリーナで開催、四〇名が参加しました。

記念講演には、焼津中学に事件の前年に新任教師として赴任し、以来事件と向き合い、久保山すずさんを見守り、『死の灰を越えて―久保山すずさんの道』や『久保山愛吉物語』などの著者の飯塚利弘さんと昨年八月に講談社のマンガ雑誌『BE LOVE』に掲載された「バラが散った日―第五福竜丸と久保山すず」の原作者の川口智子さんをお招きしお話をうかがいました（講演要旨は2、4面に掲載）。

### 静岡で研究会

二月二十八日、静岡市内では、第9回ビキニ事件の全容解明をめざす研究交流集いが開かれました。報告者の枝村三郎さん（静岡近現代史研究者・焼津市史編さん委員）は、焼津港における被災船・廃棄魚をだした漁船一―三隻の操業位置などを清水の遠洋水産研究所の資料などから割り出しました。そのうち焼津所属は二六隻しかなく、早期にマグロ漁からカツオ漁に転換して損失を少なくしていたことなどを指摘しました。

高知県のビキニ水爆被害を追跡調査している山下正寿さんは、被災した高知の漁船の乗組員の多くがガンなどですでに亡くなっていること、沖縄の漁船や韓国の漁船の被害調査を報告し、太平洋での核実験による被害という大きなとらえ方で被害の究明を進めていく必要性を述べました。

# 久保山すずさん 事件を背負い歩いた道

飯塚利弘

## 激変した人生

一九五四年三月一日未明、第五福竜丸がビキニ水爆実験で被災し、無線長久保山愛吉さんは二七〇日の壮絶な非常に厳しい闘いのちに燃え尽きてしまいました。

妻すずさんは、それまで人前で話したこともなく、三人の娘を育てながら漁から帰る夫を待つという平凡な生活を



飯塚さんと川口さん

していた一人の主婦でした。

それがある日突然、世界初の水爆犠牲者久保山愛吉氏の未亡人、世界の時の人にされてしまったのです。しかも日米政府の政治決着で支払われた二〇〇万ドルから乗組員は平均二〇〇万円ずつお金を押し

つけられたのですが、久保山さんが亡くなり、「すずさんに六五〇万円」というお金のことが当時新聞に大きく書きたてられました。これにより同情をこえて、大変な「羨望嫉妬」の渦のなかに巻き込まれていきます。

私も、このお金のことが新聞にのりはじめた頃から、焼津の雰囲気急速に変わったことを肌身に染みて知っています。その前までは、「うちのお祖父ちゃんもお父ちゃんも、みんな漁師の味方だ、久保山さんの味方だ」「なんとか久保山さんに治ってほし

い」ということを子どもたちもしょつちゅう話もするし、日記に書く。それが急速に変わったんです。

「わしゃ競輪ですつちやつたよ。こんなときに久保山さんみたいに六五〇万円もらえりゃいいのう」

「うちの宿六はロクな漁をしてこない。どうせだったら福竜丸に乗っけてもらって死の灰をかぶって死んでもらやあ、あとの衆はラクに暮らせるせたんにのう」

こういう親たちの会話が生徒のまわりに出始めた。

焼津は「歩合制」といって、魚が売れなければお金が入らないという仕組みで大変貧しかった。焼津ほど質屋の発達した町はなかったです。焼津の人たちが悪いんじゃないと思うんです。そういう貧しさがこういう雰囲気をつくりだしたのだと思います。

一方、全国からすずさんへの励ましの手紙にも嫌がらせや脅迫めいたものもきました。

「お父ちゃん なんてそんな死に方したの。」「世界初の水爆犠牲者久保山愛吉さん」

なんてことで、わたしは全国の衆からも恨まれて妬まれ、ほんとうにどうしていいかわからない、すずさんは遺影の前で毎日泣いて暮らしたわけです。

## 私が引き継ぐ

ところがある日、すずさんの表情がひじょうに変わりました。「泣いて暮らしていたけど、これでいいのかと考えた時にお父ちゃんの最後の声が響いてきました。「一人でも犠牲者が出たら俺はただじゃおかんぞ」「こんな苦しいことは俺を最後にしてほしい」そう叫び続けてお父ちゃん

る私がそれを引き継いで、みなさんに伝えていく、そういう立場にある…。なんとしてでもそのことを受け継いでいこう」。覚悟が決まったとき、すずさんの顔が晴ればれたんだそうです。

初めて訴えたのは第一回日本母親大会でした。日本中の母親が来て話す。その代表として静岡県から選ばれてすずさんは必死に訴えました。

「……この戦争をやめることが、子どもたちを幸福にする道です。戦争をやめてください。原子兵器をやめてください。これが夫の最後の声でございました……。アメリカの女性からほしいものはなんでもくれると手紙がきたが、何もいらぬ。夫の命を返してほしい。それができなければ夫を殺した原水爆をやめてほしい。原子戦争をやめてほしい、と訴えたわけです。全国の母親たちから、世界母親大会へ行くよう頼まれましたが、周囲の羨望嫉妬を前に、とうとうすずさんは断つてしまいました。

その年の八月、第一回原水

(3面につづく)

(2面からつづく)

爆禁止世界大会では広島・長崎の被爆者の代表と一緒に壇上で訴えました。

「私は原子戦争に反対します。原水爆で驚かそうとしても私たちはもう驚きません。私たちは今日、世界の人々を迎え、手を取り合って力をあわせているからです。広島長崎のみなさん、原水爆反対のためのみなさん方のたたかいの中に私を加えてください。」

わずか半年くらいの間に、すすさんは自分を変えて前へ前へと足を踏み出していったんですね。

### 世界へ訴える

翌五六年アメリカはビキニ環礁で核実験を再開しました。同時にイギリスも太平洋クリスマス島での実験の準備を始めました。すすさんに国連へ行つて訴えてほしいとの声が高まり、すすさんも覚悟を決めて、羽田まで行きましたが、アメリカが入国ビザを出さず、行くことはできませんでした。

なんとしても世界の場で発言させようと、一九五七年か

ら五八年にかけての第一回アジアアフリカ諸国人民連帯会議の日本代表団に参加することになりました。ところが本会議での発言が抑えられてしまった。それでもすすさんは屈しませんでした。宿舎のロビーで彼女は外国代表たちに訴えたんです。そうでなければ広島・長崎の人たちとの約束も果たせない、と。

大変感動したインドのネール首相夫人は、すすさんをインドに招待し、民衆の前で語る機会をつくりました。その後も周囲の妬みや誤解が向けられましたが、そういう声から子どもたちを守ろうとしました。「おかげで私たちは言われることなく、のびのびと学校生活を楽しむことができました」と子どもたちは話していましたが、それはすすさんの意地というか、なんとしても子どもにだけは迷惑をかけたくないとの思いで、そういう人でした。

### 平和は黙っていては来ない

公の場で発言しなければならぬのは大変だったでしょう。と問われたとき、すすさん

は、「ローマ法王が、平和は黙っていたって訪れないと思いましたが、本当にそう思います。みんなができる平和運動を少しでもやっていけば、必ず大きな力になるんです」と応えました。

また、私のクラスの生徒たちが、冬休みのレポートのためにすすさんのところへ行つていろいろ聞きました。次から次と行つて同じ質問をする

が、全部の生徒に同じことを誠意をもって答える、だから一日に四回も五回も同じことをしゃべる。それが大晦日まで続き「お正月が終わったらまたお話するからおいで」と言ったら生徒たちは一月二日からでかけたという。そのことを知ってビックリしました。

すすさんは言いました。「子どもたちにお話をするには、少しも苦になりません。私がお話したことはきつと、子どもたちから親に伝わり、また友達に伝わり周りへと広がるでしょう。広がっていけばそれだけ真実を知り、原水爆や戦争への批判が強くなるでしょう。子どもは次の世代の中心になっていく人たちだ

からちつとも苦にならない。希望が持てる」。

### 願いを未来に

三〇周年(一九八四年)、ビキニデーの前に、すすさんがお墓を一生懸命お掃除してました。すると近所のお年寄りが増えて、「あんなつちがやつてる原水爆禁止の運動とやらに、変なことを言う衆もあるだけだが、あんなつちがそういうことをやってくれるおかげでわしも孫もこうして生きていられる」。

言われたすすさんはビックリしちゃった。いつも聞いてるのは陰口ばかりなのに、お礼を言われたわけですから。

### マンガ『バラが散った日』をかいて

川口 智子

漫画家をしております。「子どもに安全なものを食べさせたい」という願いから生協に参加し、その平和活動のなかで、ビキニ事件を知りました。飯塚先生のお話は何回聞いたことでしょうか。

焼津を歩き、お話をうかがうなかで、久保山すすさんに、

そのことをビキニデー集会のメッセージに書きました。

「どうぞ一時の、熱い、義理、おつきあいなどではなく、人間を大切にし、まっすぐに核兵器をなくし平和をつくる運動にしてください」。

現在の人たちがこのことを受け止めて自分のものにしてほしいとの願いだと思えます。

すすさんは九三年、七十二歳で亡くなりましたが、最後のビキニデーの全国集會に「被爆者とその遺族が生きているうちに、一発残らず核兵器をなくしてください」という「おことづけ」を寄せました。これは静岡県の平和運動の大きな指針になりました。

母として、人生の先輩としての仲間のような親しみを抱くようになりました。

被災五〇年を前にして、何かできることはと考え、すすさんのことを漫画にしようと思いましたが、出版社や団体の機関紙など、片っ端から断

(4面下につづく)

## 田中里子さんが語る 地婦連の平和運動ビデオ 完成

戦後の地婦連の運動を50年余にわたりとりくんできた田中里子さん（東京地域婦人連盟常任参与、元全国地婦連事務局長）が語る「私と地婦連」のビデオがこのほど完成しました。

ビデオは「草創期の地婦連」、「消費運動」、「平和運動」の全3巻、平和運動編では、第五福竜丸被災に端を発した署名運動と1955年の第一回原水爆禁止世界大会への代表参加が地婦連の平和運動の出発点となったこと。広島に降り立った代表団が駅前に林立する赤旗の波に驚いたとき、山高しげり会長の「赤旗の人も地婦連の人も原爆ではだれかれの区別なく死ぬのであって、この運動はみんなが一緒になってやらなければならない」との“鶴の一声”のエピソードが印象的です。

原水爆禁止運動の分裂から統一実現への努力と第一回国連軍縮特別総会にむけての署名運動では地婦連が500万を超える署名を集め、田中さんが502名の代表団の事務局長を任されました。6月12日には初のNGOデーとして国連総会義場で演説し、峠三吉の「にんげんをかえせ」を最後に朗読して訴えたことなど、感動的です。

「世界の子ども達に一日分のおやつ代を」と途上国の子どもへの食料援助の運動やバングラディッシュの子どもの失明を救う運動など多彩なとりくみが語られます。

いま伝えたいこととして、さまざまな人たちと一緒に地域で取り組みをつくること、田中さんは第五福竜丸平和協会の評議員でもありますが、「第五福竜丸から平和を発信する連絡会」で誰もが参加できる運動を考えていると、第五福竜丸の図録を紹介して終わります。（企画＝田中里子さんの証言を記録する会、製作＝桜映画社、15750円）

## 3月、展示館来館者の感想より

展示のいたるところに「死の灰」という言葉を目にした。「死の灰」の恐ろしさを痛感しました。（10代 男性）

ゴジラが好きで小学生の頃から第五福竜丸を知っていた。日本中や世界に第五福竜丸のことを知らせてほしい。僕も伝える。それがひとりひとりにできることだ。（20代 男性）

今日は幼い子を連れていたのでゆっくりとは見られませんでした。今後二人を連れて来ようと思います。子どもに核の恐ろしさを説明できる親になろうと思いました。（30代 女性）

このような立派な建物に保存され、

船の風化は心配なくなりましたが、日本人の原爆に対する心の風化がいよいよ心配になります。（50代 男性）

## 寄贈 ありがとうございました

◇宮城県矢本東小学校の阿部真弓教諭から、6年生の文集「忘れない第五福竜丸 伝えよう第五福竜丸」一学芸会で創作劇「わすれないで第五福竜丸」に取組んだ先生と生徒と親たちの70ページにわたる感想文集で、シナリオも収録されています。劇作りを通して平和への思いや友情を深めた様子がよくわかります。

◇田園調布学園中等部・高等部『葦』35号 社会科学習より

◇日能研西船橋校「第五福竜丸について考えてみよう」

\*

見学した学校からのお便りなど多数届いております。



## ボランティアの会学習会

3回目は若島幸作さんをお招きして、青木佳子さんとともに、地元江東の保存運動について教えていただきました。

（3面からつづく）  
仲間の漫画家を通して紹介された編集プロダクションの社長さんが趣旨に賛同して、出版社にかけあってくれたことになりました。ダメならインターネットでも発信しようとのこと。私は早速シナリオ作りを始めました。

『BE LOVE』（講談社、発行二〇万部）は、さまざまな女性誌のなかでも、家族愛や友情、子育てなどをテーマにした作品を掲載している雑誌です。編集長は「平和をテーマにしているのに、売れないとは思いますが、やる必要がある」と、読切りの常識を超える六〇ページをくれたうえ、第五福竜丸の記事も載せてくれました。

いろいろな人が関わり動いてくれました。私の原作で漫画を描いた京都在住の立木美和さんも、連載のオフアートを断つてもいいから描かせてほしいとまで言ってくれました。みんなに助けられました。やって良かった、本当に嬉しかったです。